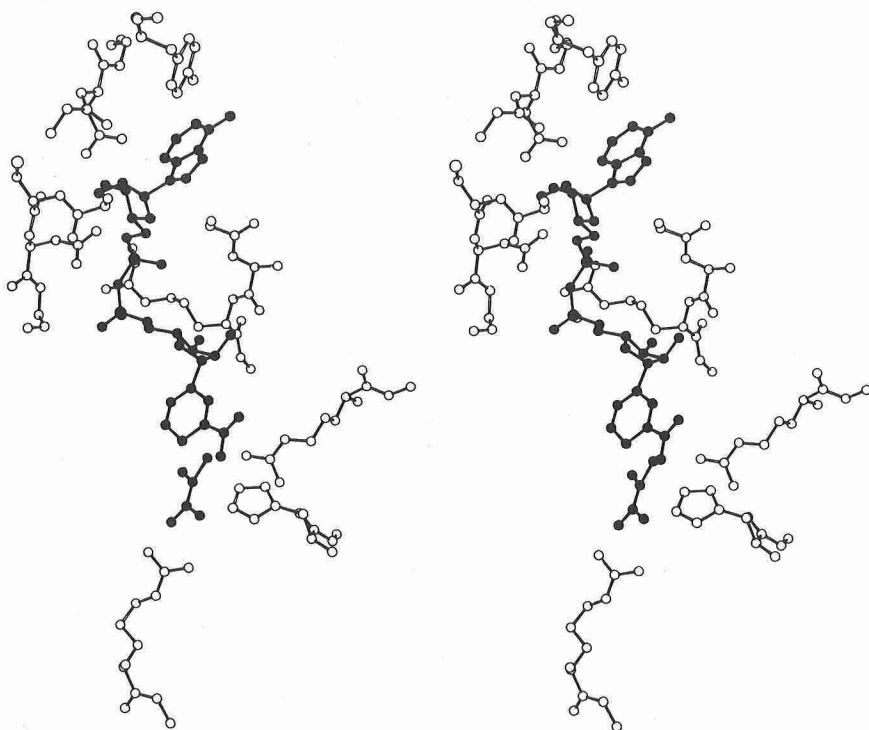


8卷7号 昭和52年3月

廣報

東京大学理学部

(題字は柴田雄次名誉教授)



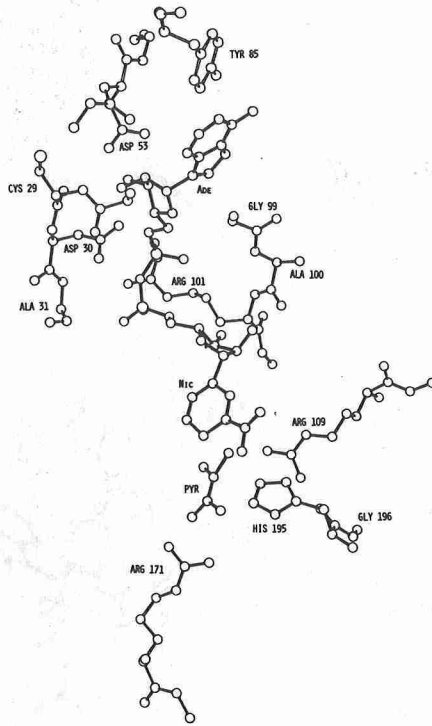
目 次

“Chemical” Chemistry
斎藤信房先生
我が回顧
島内武彦先生

斎藤信房…3
富永健…4
島内武彦…6
宮沢辰雄…7

卒業前後のこと
下郡山正巳先生
〈学部消息〉

下郡山正巳…9
駒嶺 穆…10
12~13



タンパク質の分子構造と機能III
(表紙説明)

表紙に描かれているのは、サメの1種 (*Squalus acanthias*) の筋肉から採られた乳酸脱水素酵素 (以下LDHと略す) の活性中心付近の立体図で、補酵素NADと基質ピルビン酸とが結合している様子を示した。

LDHは、筋肉の疲労の原因である乳酸をピルビン酸に変える働きがあり、またヨーグルトなどの乳酸菌飲料も、乳酸菌中のLDHの働きで作られる。

表紙の図では、NADとピルビン酸の原子を黒丸にしてある。上の方にNADのアデノシン部分 (ADE)があり、LDHとの結合にはアスパラギン酸 (ASP-30, ASP-53)やチロシン (TYR-85)などが、リン酸部分との結合にはアルギニン (ARG-101)が、また下方にあるNADのニコチンアミド部分 (NIC) およびピルビン酸 (PYR) との結合には、ヒスチジン (HIS-195)やアルギニン (ARG-171) などのアミノ酸残基が関与しており、反応そのものには、ニコチンアミド部分とヒスチジン (HIS-195) とが重要だとされている。

(生物化学教室 田隅三生)

“Chemical” chemistry

齋藤信房（化学）

昭和14年に化学科三年生になった私が、木村健二郎教授からいただいた卒業論文のテーマは、「93番元素について」と「随伴鉱物間に於けるラジウムの分配」の二つであった。前者は人工放射能に関するもの、後者は天然放射能に関するものであるが、それ以来今日まで私はずっとこの二種の放射能と取組んできたことになる。

卒論のころは、O. Hahn らによって核分裂の現象が発見された直後であったが、O. Hahn が化学者であることや彼が核分裂生成物の確認（彼はもっと控え目の表現をしているが）に用いた実験の方法が正統的な“Chemical” chemistryであったことは当時の私を勇気づけるに充分であった。以来、放射能と取組んだおかげで、化学教室以外の多くの先生方とお会いし、いろいろの分野の学問の面白さを教えていただいた。物理学者では仁科芳雄博士のような偉大な先生にローリツツェン検電器による放射能測定の手ほどきを受け、また先般定年になられた宮本梧楼先生には、手作りのガイガー計数管をはじめ見せていただき、サイクロトロンを用いて放射化したうさぎの骨などの放射能がどの程度かを知る機会を得た。地球物理学、地質学、鉱物学の方々からは、新しい年代測定法の面白さを教えられ、さらに人類学の渡辺直経先生や、考古学の専門家のおかげで、放射性炭素年代測定法（Radiocarbon dating）の会合を通じて、遺跡とか古文化財の興味深々たる一面に触れることができた。植物や動物の先生方とは比較的最近まで御縁が薄かったのであるが、アイソトープ総合センターの世話を引受けてから、トリチウムの生物学的効果の話とか光合成における最近のトピックなども耳に入るようになった。多くの専門の先生の揃っている理学部に勤めたことはまことに幸せであったと言える。

放射能測定は物理的測定の一つであることはもちろんであるが、また化学的手法も必要であることが予想外に多い。放射線測定器の進歩は著しく、金ば

く検電器、泉効計からはじまってガイガーカウンター、そして最近では半導体検出器と多重波高分析装置、液体シンチレーションカウンターなどつぎつぎと強力な武器が現れるのを化学者の私は驚異の眼をもって見守ってきた。最近では物理的方法による非破壊分析などが益々盛んとなり、化学などは不要と思っ
ている若い人達もいるようである。ところが、“どっこい化学は生きている”と言いたい。極低レベルの放射能の測定には今でも分離化学や合成化学が大きな役割を果している。たとえば、原子炉で照射した生物学的試料などは、そのまま放射線測定器にかけても、存在する全元素の定量は難しい。ナトリウムなどの成分が非破壊分析を妨害するので、化学分離を必要とするのである。放射性元素による年代測定でも試料の分解と化学処理は不可欠であり、まして液体シンチレーションカウンターを用いる年代測定では、有機合成さえ行うことが必要となる。また、きれいなアルファ線スペクトルを得ようとすれば、均一な薄層をつくる化学操作を必要とする。このような分離、合成、マウンティングには分離化学や合成化学などの高度の知識と経験を必要とする。米国の原子力研究所には多くの核化学者がおり、中には核物理の人達と同様に立派な論文をフィジカルレビューなどに投稿している人がある。しかし、面会して話を聞いたところでは大部分の彼等の強味はやはり高度の化学的素養であった。長年放射能と取組んだ私の得た結論は、化学者は何よりも“Chemical” chemistryを大切にすべきであると言うことである。これからも、専門の異なる人達と組んで学際
的研究を続けていきたいと希望しているが、私の乗る小船が大洋における作業を終えて帰ってゆく母港は“Chemical” chemistryとよばれる港であろう。

定年を前にして、私に学問の面白さを教えて下さった諸先生、私をあらゆる面で助けて下さった“supporting group”の方々に心から感謝する。



齋藤信房先生

富永 健（化学）

齋藤信房先生は昭和15年本学部化学科を御卒業後、昭和16年京城帝国大学理工学部助教授に任ぜられました。終戦後、昭和21年九州大学理学部に転任されたのち、昭和24年に本学部助教授に就任されました。そして昭和31年には本学部教授に昇任され、無機化学、放射化学講座を担当されて今日に至りました。

齋藤先生の三十余年にわたる御研究は、天然の放射性元素の地球化学的研究にはじまり、反跳化学、同位体の分離濃縮、放射化学分析など、無機化学・放射化学の広い分野にわたっておりますが、すべて同位体化学—同位体の性質や反応の解明とその応用—という一貫した観点に立つものであります。

先生の御研究の中心は、原子核変換から生ずる励起化学種の反応をしらべる反跳化学（ホットアトム化学）であります。昭和30年代から約20年間にわ

たって独創的な手法を用いてこの分野の研究を系統的に続けられ、その成果は世界的に高い評価を受けています。また、固相化学反応の研究へのメスbauer分光法の応用も欧米にさきがけた開拓的な研究であると云えましょう。わが国や朝鮮産の岩石、鉱物、鉱泉沈殿物などにおける放射性同位体の地球化学、とくにラジウムの地域的分布についての研究は、初期の重要なお仕事のひとつであります。近年はさらに岩石や鉱物の年令や成因・起源の研究に同位体化学の手法を取入れるなど、同位体地球化学の発展に大きな寄与をされました。安定同位体の分離濃縮や放射性同位体の製造・分離・分析などについてもきわめてユニークで多彩な御研究を行っておられます。このように、わが国の無機同位体化学の発展に先生が果された先駆的指導的な役割と御功績に対

して、昭和49年度日本化学会賞を受賞されました。

先生の御指導の下に育てられた100名近い弟子達も現在、地球化学、分析化学、無機化学、放射化学の広い分野でそれぞれ活躍しております。後進の教育にあたってはつねに化学者としての厳しい態度をもって臨まれましたが、一方、平生、先生に叱られたことのあるものは殆んどないほど弟子達の眼にうつる先生は円満で公平な御人柄であります。

先生は研究教育ばかりでなく、科学技術行政、とくに原子力研究行政にも貢献されました。学内においては、多年の念願であった東京大学アイソトープ総合センターが先生の御尽力により昭和45年に誕生し、現在まで初代のセンター長を併任しておられますが、このセンターは欧米の水準に比べても遜色のない立派な施設であります。

先生は昭和38年から約2年間、国際原子力機関（IAEA）のアイソトープ部長の要職をつとめられ、「核変換の化学効果」国際シンポジウムの主宰をはじめ国際学術協力を尽力されたほか、国連、IUPACの幾つもの委員会で活躍され、多くの国際会議の組織・運営にも優れた手腕を発揮されました。このようなめざましい国際的活動は先生の御業績の世界的な評価に支えられたものであると同時に、先生が外国語にきわめて堪能であられ、かつ国際人としての感覚を身につけておられることを物語るものであります。

先生は現在も日本化学会副会長として大変御多忙であります。今後ともわが国の放射化学・無機化学分野の柱として活躍されますよう心からお祈りいたします。

我が回顧

島内武彦（化学）

筆者は6年間を1週間と呼ぶこととしている。人生最初の1週間は家庭にいた。（もっとも後の方ではしばらく幼稚園にいった。犬張子印の大きな円い印をつけていった同じ園に高橋秀俊先輩が居られた。もちろんそういうこととは夢にも考えなかった。）第2週間は小学，第3週間は中学，中学は5年だったが1年ゆっくりした。第4週間は高校と大学。卒業以来理学部の御世話になり第5，第6，第7週は副手，助手，助教授，第8，第9，第10週は教授の役目を与えられた。わりに区切り良い人生を過ごさせて頂いたと思っている。

さて10週間を過ぎて，自分の人生を貫いている方針は何だったろうかを考えて見た。これはいろいろ

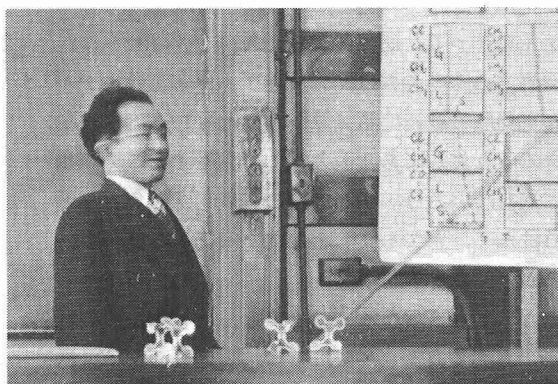


1972年 プラークの高分子研究所におけるシンポジウムでの講演中にソ連の分子構造研究者Volkenstein教授の書いた似顔絵

表現出来そうだが，どうも不精と慾張りというのが一番あたっているのではないかと思ひ恐縮している。しかしこの性格も少し道楽的な処があり，不精を極端に追求するあまり，それを成し遂げるために大いに勤勉にはたらいたりする自己矛盾をおかしている。

実験装置も出来るだけ自動化しようとした。しかし自分でつくったものは大概うまく行かず手こづいた。後期の卒業実験の時，手廻しの卓上計算機を水島先生から貸して頂き，これは便利なものがあると感服した。爾来コンピューターとのつきあいは長い。水島研究室で新しい分光器がはいった時，その波長較正曲線を計算するため十数台の手廻し計算機を借り集めて来て皆で計算したことがあった。なかなか賑やかな音が出て，化学教室の前を通っている男が「オヤ大学でもパチンコをやっているのか」と言った実話がある。電子計算機ができてからはプログラムは間違っても直せば良いので有難い。高橋，後藤両氏のパラメトロンには大変御世話になった。コンピューターをあまりしばしば使ったので，少しはサービスをしなさいと言うことになり大型計算機センターをお世話することになった。一体にプログラムをやっている人達は自己がいかに過ちを犯すことが多いかを自覚しているので大変つきあい易い。

最近コンピューターにおけるデータ格納容量が急激に大きくなっている。数年のうちには1億頁の電子ノートブックが使えるのである。これは帰納的な科学にとっては大いに役立つ。最近ではこの中に今までのあらゆる化学現象の記録を整理してしまっておくことを考えている。これは筆者のような不精者にとってはこの上なく便利である。もちろん化学者にとっては新しい現象を発見することが何よりの喜びであるが，最近のように研究者が多くなつては新しいかどうかを判定するのが一仕事であるので，多くの方の共感を得て共同で仕事を進めている。小生第11週目以後の仕事として格好のものと愚考している。



島内武彦先生

宮沢辰雄（生化）

島内先生は昭和16年3月に理学部化学科を卒業、21年11月に化学科助教授、34年4月よりは教授として物理化学第一講座を担当されて教育と研究につくされた。とくに分子分光と分子構造の分野で重要な業績をあげられ、そのうち、「赤外線吸収スペクトルによる分子構造の研究」で日本化学会賞（39年4月）、「多原子分子の力場の研究」で日本学士院賞（47年6月）を受けられた。また、47年よりは大

型計算機センター長（併任）として、大きな貢献をされたが、この3月限りで東京大学では定年にられる。

わたくしは、水島研究室で卒業実験をはじめた24年4月より7年間あまり、直接に島内先生の御指導を受けた。研究室における先生はいつも笑顔（写真）で、研究計画などで御相談にいくと、「ああいいぜ」といわれるのが常であった。わたくしどもが伸びや

かに生長する(かもしれない)を励ましつつ見まもって下さつたらしい。これは、ずいぶん寛大な教育方針であつたと思う。

新しい意外な実験結果には、先生はとくに強い関心を示された。予期どおりにならなかつたときには、「うん、おもしろいね」といわれていっしょに考えてくださった。意外な事実の発見こそ、化学に新しい発展をもたらすものとして重要視されたのである。これとも関連するが、先生は目的志向型の研究よりも、なるべくとらわれない自由なふんいきでの研究をすすめられた。ひとには決して威圧的でなくて大らかであり、いわゆる効率をあげるよりはむしろ、真に新しい成果の生まれることを念じておられたように思われる。

研究を大いに楽しむのが先生のやりかたである。分子構造モデルも大好きで、紙細工で回転異性体のモデルを作って、研究発表のときにも利用された(写真)。そのつぎは、プラスチック細工のモデルで、電気陰性度に応じて原子を色わけし、内部回転できるようにしてある(大きくて見やすいので講義用に適している)。研究成果の発表も、気負つたところはなく、とても楽しそうで(写真)、聞いていてわかりやすかつた。

かなり強い自信をもって先生は、みずからの独特の研究方法で邁進された。その基調は基準振動計算であつて、これによって、赤外吸収とラマン散乱スペクトルを解析し、分子と結晶の構造(原子配置と

調和ポテンシャル)を明らかにすることである。当時の水島研究室では、中川一朗君(現在は東北大学教授)も振動計算のプロであつた。手まわしの計算器で行列(5次ぐらいまで)の固有値問題を解くのである。後に電動式になるとともに、計算もエスカレートし、9次の行列をいくつも扱うようになった。これにはかなりの日数を要したが、ともかくやりおさせたのは、島内先生の暖かいはげましのおかげである。

その後、先生は物理化学第一講座を担当され、わたくしは大阪大学に移つた。先生は、「とにかく大いに仲良く、また活潑に意見を交換して東西で研究を進めようではありませんか」といわれたが、実際に先生は、学会では振動スペクトルの研究のますますの発展のために、積極的(生産的)なコメントをされ、またみずからもしばしば研究発表をされた。

46年3月、生物化学教室では四人の教授が定年退官されることになり、島内先生はその後の人事選考の世話をしておられた。わたくしは生物化学教室に来ることになったが、先生は教室の再建のために協力してくださつた。

最近の先生は大型計算機センターの充実と利用のために努力をつくされ、それとともに、学術情報を学問研究に役立てるために新たな意欲でとりくんでおられる。先生はまもなく定年になられるが、今後ますます健康に、そして大いに楽しみながら、新たな仕事に独創性を発揮されることを期待している。

卒業前後のこと

下郡山 正 巳 (植物)

私は、いまでも故郷だと思っている朝鮮の京城で生まれ、中学を出るまでそこでくらしした。それから、どうしたはずみか、父祖の故郷である宮城県、仙台をへて、東京に出てくることになってしまったが、ちょうどそれは、理学部二号館ができて、植物の教室が小石川の植物園から移って間もない昭和12年であった。

私は小さいときから身体が弱く、このときも相変わらず虚弱のまま大都会に住むことになりながら、困ったことに乗物ぎらいであった。私が乗って酔わないのは馬車と人力車くらいであった。このために、夏の休みなどには、とにかく、フォードの幌かけの乗合かになかで、田舎まででだして、馬車で風景を眺めるのを大きな楽しみとした。林道を通りながら自然を観察するのは、私にとって、無上のしあわせであった。都会にもどると、このようなわけで、人力車が唯一のたのみで、仙台にいたころから、ひとにしろれないように、いつの間にか愛用することとしていた。東京にきてからは、気風のいい俣夫に出会おうと、財布にいくらか残っていないときでも、祝儀をはずんで、意気がったりもするようになっていた。

このような身体の状態、大都会のまん真中で、しかも、新しくもならなければならない植物学の勉強ということで、私のなかには、著しく、ちぐはぐなものが多かった。

中期(2年)の後半から、私は服部静夫先生について勉強することになり、まず、ガッターマンの有機化学の実習書で、基礎の実験を教えていただくこ

とになった。順調に進むこともあったが、失敗したり、蹉跌をきたすことも多かった。最初にアミルアルコールの臭をかいたときには、何が何だかわからないままに昏倒したし、ピリジンを始めて蒸留したときには、いつのまにか、ほとんど失神してしまっていた。こうした打撃的なショックから、もどおりに立直るためには隙を欠くことが多かった。こういうときに私は、いつとはなしに、芝居、なかでも歌舞伎の世界で、回復をはかることにしていた。時期は多少前後するかもしれないが、いまでも、天衣紛上野初花、菅原伝授手習鑑、伽羅先代萩などなどのいろいろな場面が入乱れて、しかし、鮮明に浮んでくる。最初にあげたものの後半、雪暮夜入谷畦道—羽左衛門の直侍がでると、木挽町界隈の蕎麦屋というそばやが大入満員になるという話がいまでも残っていて、私もそばが無性にたべたくなったことをときどき想い出すことしきりである。いまだに私の割箸のつかい方がどうにもぎごちないのは、十五代目のなんともいえない仕種の悪影響をうけたためかもしれないと思うことがある。

こうしたなかでの卒論のテーマは反応しやすい水酸基と反応しにくい水酸基とが共存するとき、この反応しにくい水酸基にブドウ糖を、まず有機化学的に入れてみるという内容の難題であった。どうかこうにか、きりぬけることができたが、それから、私の性分に合せて遅い乗物で酔わないようにゆっくりした旅を続けさせていただいた。申し訳がない気がするとともに、私にとって無上にしあわせな旅だったことを感謝したい気持ちでいっぱいである。



下郡山正巳先生

駒 嶺 穆 (植物)

広報編集委員の木下先生から、この春定年退官される下郡山正巳先生のことについて、“型破り”の一文をかくようにとのご依頼をうけて大変困惑した。何故なら下郡山先生ほど型通りの道を歩まれた方は少く、また先生ご自身も型を破らぬことを信条とさえしてこられた方だからである。論より証拠、先生のご略歴がそれを示している。

先生はお名前の示す通り大正6年巳年正月のお生れである。昭和15年3月本学部植物学科をご卒業後、昭和18年本学部副手、20年同助手、29年同講師、32

年同助教授になられ、37年以降は教授として植物生理学講座を担当され、通算して約35年間一貫して本学部植物学教室でご研究と学生の指導ならびに教室と学部の運営に力をそそいでこられた。

先生はご自分やご自分の学問を他人に語るのを好まれない。従ってご自身の学問の宣伝は得手とせず、一般的な雑誌や本にかかれたものは極めて少い。しかし先生の学術論文はフラボノイドなどの植物色素に関する生理化学的研究から、植物の呼吸、発芽、発根、組織分化等植物生理学のあらゆる分野を網羅

しているといつてよいほど、広範多岐にわたっており、限られた紙面ではとてもご紹介しきれない。

このように広い領域にわたる先生のご業績を通観してみると、先生の学問に濃い影を落している人物が二人いるように思う。一人は先生の恩師服部静夫先生である。下郡山先生は服部先生のいわゆる一番弟子で、服部先生のライフワークであった植物色素特にフラボノイドの研究を継続発展された。当時有機化学に偏していたこの領域で hydroxychalcone glycoside の flavanone glycoside への酵素的転換をはじめて明らかにされるなど、植物化学に生物学の息吹きを吹きこまれるような優れた数々の業績を残された。

もう一人はオーストリアの植物学者 Hans Molisch ではないかと思う。彼は正統時代のウィーン大学の植物生理学の教授で、1923年には東北大学に招かれて教鞭をとった人であるが、植物に関する自然現象を鋭い目で観察し、そのしくみを化学的にときあかした数多くの優れた業績を残している。下郡山先生は Molisch に直接薫陶をうけられたわけではないが、常々ご自分を Molisch の伝統をうけつぐ最後の人といわれ、その著 *Botanische Versuche ohne Apparat* は下郡山先生の座右の書となっている。たしかに botanist の少なくなった植物生

理学の領域にあつて、Molisch に優るとも劣らぬ植物学全般にわたつての該博な知識と鋭い観察力と洞察力をもたれた先生は貴重な存在で、最後の botanist というにふさわしい方といえよう。

先生は巧みなユーモアを混えたユニークな、そしてしばしば“難解な”日本語を語られる。ご自身はこれを“高級な”日本語と称されて、内心かなりの自信をおもちのようである。それもそのはずで、先生は明治の文豪落合直文の直孫にあたられるのである。そのせいでしょうか先生は校正の達人でどんな小さなミスをも見逃さずに見つけ出す特技をおもちである。校正能力は年をとると年々落ちるといふが、先生の場合にはこれは全くあてはまらない。

また先生の語学力は抜群で、先生が解読される言葉は、8ヶ国語に及んでいる。

先生は近年理学部の評議員や植物園長として administration の仕事につくされ、理学部の運営に貢献されてきた。しかしこれは同時に先生から研究を遠ざけてしまったのであり、先生の本来の姿は不自然にゆがめられているように思えてならない。「ルーペ一つでも、研究はできる。」これは常日頃先生が私共にいわれてきたお言葉であつた。ご退官後はルーペ一つで研究を楽しまれ、厳しいご批判と該博な知識で今後共、後進のご指導を頂ければ幸である。

<学部消息>

教授会メモ

1, 2月理学部会合日誌

1月12日(水)	教務委員会	13.30~17.00
17日(月)	理系委員会	15.00~16.10
19日(水)	教授会	13.30~16.10
24日(月)	理職定例交渉	12.30~13.40
2月9日(水)	会計委員会	13.30~14.30
	教務委員会	13.30~15.30
10日(木)	企画委員会	15.30~17.00
14日(月)	理系委員会	15.00~16.10
16日(水)	人事委員会	10.00~13.00
	教授会	13.30~16.30
21日(月)	理職定例交渉	12.30~13.40
23日(水)	会計委員会	13.30~13.45
	企画, 会計合同委員会	13.45~18.00
25日(金)	放射線管理委員会	16.00~17.00

1月19日(水) 定例教授会
化学新館講堂

1. 前回議事録の承認
2. 人事移動等報告
3. 総長候補者選出のための代議員を選出
4. 理学部規則の一部改正
必修および選択科目表の一部が改正された。
5. 教務委員会報告(寺山)

2月16日(水) 定例教授会
化学新館講堂

1. 前回議事録の承認
2. 人事移動等報告
3. 理学部・転学科について
4. 学士入学について
5. 昭和52年度情報処理関係内地研究員の受入れについて
6. 植物園長に古谷教授を選出
7. 下郡山教授の御退官に伴って評議員に江上教授を選出
8. 人事委員に吉川, 飯野, 高橋(武)の3教授を, また, 会計委員に岩堀, 桑原, 岡田の3教授をそれぞれ選出(いずれも半数交替)
9. 会計委員会報告(田村)
10. 教務委員会報告(寺山)
11. 全学一般教育ゼミナールについて(霜田)
12. 入試検討委員会報告(伊藤)

人事異動

〔助手〕

教室	官職	氏名	発令年月日		
数学	助手	坂内英一	51.12.31	退職	学習院大学助教授
化学	"	磯谷順一	52. 1.11	休職	
物理	"	安藤恒也	51.12.26	復職	
数学	"	砂田利一	52. 4. 1	名古屋大学講師昇任	
地質	"	新井章司	52. 4. 1	静岡大学助手に転任	
数学	"	坂本幸一	52. 3.31	退職	津田塾大学就職
動物		井尻憲一	52. 1. 1	助手に採用	

〔講師以上〕

生化	講師	猪飼篤	52. 2. 1	教育職(一)2等級(東京大学助教授理学部)に昇任させる	
化学	助手	脇田宏	52. 2. 1	教育職(一)3等級(東京大学講師理学部)に昇任させる	
地質	講師	吉田鎮男	52. 4. 1	静岡大学助教授に昇任	理学部

昭和52年度日本学術振興会外国人 招へい研究者(長期)

外国人招へい研究者(長期)	受入責任者	受入期間	備 考
Dunlop, D. J	小嶋 稔 教授	昭 52. 4. 1 ~ 53. 3. 31 (9 か月間)	トロント大学地球物理学部 準教授

1, 2 月 海 外 渡 航 者

所属	官職	氏 名	渡 航 先 国	渡航期間	渡 航 目 的
臨海	教授	小林英司	イ ン ド	1. 8 ~ 2.15	第1回国際鳥類内分沁シンポジウム出席及び研究連絡
物理	教授	植村泰忠	アメリカ合衆国 カ ナ ダ	1. 9 ~ 1.21	第4回冬期固体物理研究会議出席および研究連絡
"	"	和田昭允	アメリカ合衆国	1.25 ~ 1.30	"生体高分子と生体膜の電気的性質"シンポジウム出席
"	助教授	鈴木増雄	イ ン ド	1. 4 ~ 1.20	理論物理学の領域に関する国際会議出席及び冬の学校参加
"	助手	清水韶光	フ ラ ン ス	1. 9 ~ 6.30	素粒子理論の研究
化学	"	梅沢喜夫	アメリカ合衆国	1.14 ~ 1.23	電気化学に関するゴードン研究会議出席および研究連絡
地球	"	浜野洋三	プエルトリコ パ ナ マ	1.17 ~ 3. 7	グロマー・チャレンジャー号第52次航海に乗船, 地球物理学に関する研究
化学	教授	島内武彦	フ ラ ン ス 連 合 王 国	2. 6 ~ 2.16	CODATA (科学工学データ委員会)本部会議出席ならび科学情報データベースの調査およびデータベースに関する研究調査
化学	教授	向山光昭	アメリカ合衆国	2.26 ~ 3. 6	有機合成化学に関する会議出席
物理	教授	小柴昌俊	ドイ ツ 連 邦 共 和 国	2.28 ~ 3.14	『ベトラ共同実験』及び『シェード協力協定』に関する討論会出席
物理	助教授	矢崎紘一	ス イ ス フ ラ ン ス	2.20 ~ 6.20	原子核理論の研究
地理	助教授	小堀 巖	イ ン ド	2.27 ~ 3.10	国際半乾燥熱帯地域作物研究所理事会出席及び研究連絡
動物	助手	守 隆夫	アメリカ合衆国	2. 5 ~ 4.30	ホルモンによる発癌機構解析の研究
動物	助手	馬場昭次	連 合 王 国	2.28 ~ 4.28	織毛・鞭毛運動の機構に関する生物物理学的研究

編 集 後 記

御退官の齋藤信房，島内武彦，下郡山正巳の三先生からそれぞれ滋味あふれる文章をいただき，また，三先生に近く接しておられる方々をお願いして，この号を編集しました。

広報が新委員で編集をはじめてもう一年がたちました。あらためて平素の皆様方からの御援助に感謝いたします。島内先生には，表紙について長い間お力添えをいただきましたこと，お礼を申し上げます。

編 集：

木下清一郎（動物）	内線 3361
鈴木秀夫（地理）	内線 3288
田隅三生（生化）	内線 7372